HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	民族衣装に見る文化の創造的継承
Author(s)	北川, 恵美; 李, 麗萍
Citation	北海道大学観光創造フォーラム「ネオツーリズムの創造に向けて」報告要旨集, 61-62
Issue Date	2008-03-14
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39098
Type	proceedings
Note	北海道大学観光創造フォーラム「ネオツーリズムの創造に向けて」. 平成20年2月29日～平成20年3月3日. 札幌市. 「ヘリテージツーリズム」セッション『ヘリテージツーリズムをめぐる新視点～日中双方の視点から：建築遺産から無形文化遺産まで』. モデレータ：山村高淑. 平成20年3月2日.
File Information	04-kitagawa_li.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

民族衣装に見る文化の創造的継承

Succession and Innovation of Traditional Culture: A Case of Ethnic Costume of the *Naxis* in Lijiang, China

北川 恵美[*1]・李 麗萍[*2]
KITAGAWA Emi・LI Liping

キーワード：民族衣装、文化遺産、創造的継承

1. 外部記憶としての文化遺産～肉体の消滅と記憶の継承

伝統的に受け継がれてきた民族衣装は、その民族の有する工芸技術の水準のみならず、民族の記憶や思想、社会性さえも映し出す鏡、貴重な文化遺産である。

そもそも、思考や思想、記憶といったものは、脳の外部に出力しなければ、他人には理解してもらうことはできない。また、そうした人間の脳内に発生する思考や記憶は、人が死ねば失われてしまうものでもある。だからこそ私たち人間は、生きた証として、脳の外部の、感覚で捉えることのできる世界の内に、様々な思想や「私が生きていた」という記憶を定着させようとするのである。記憶の外部化とでも言えるだろうか。これは、自らの身体を使い、身の回りの様々なモノに物語を持たせる作業である。そうすることによってはじめて、私たちの身の回りの世界も意味をなしはじめるのであり、我々の存在も位置付けられるのである。肉体の死を超えて継承される文化や芸術、すなわち文化遺産は、その意志の表れだと言えるだろう。私たちは、文化遺産にこうした人間の積極的な意志を読み取ることが重要だと考えている。

2. 民族衣装とファッション

しかし文化遺産と言っても、民族衣装が衣服である以上、遺跡などとは決定的に異なる特徴がある。それは、ある時代の様式で形態が固定化されて継承されるのではなく、その時代の流行や社会情勢とともに、常にその形態を変化させ、継承されていくという点である。当たり前のことだが、民族衣装にも流行がある。これは私たち日本人にとっても、着物を考えてみればすぐに理解できることだろう。

麗江ナシ族は、急速な経済発展を遂げる多民族国家・中国において、特に女性において、依然として高い民族衣装の着用率を誇る民族である。その背景として特に注目すべきなのは、近・現代において、社会情勢が変容する節目節目で、非常に柔軟な発想に基づき民族衣装デザインの改良を行っている点である。特に 1997 年に麗江旧市街地が世界文化遺産に登録され、急激な観光地化が進む現在、これまでになく活発且つ斬新な改良が行われている。つまり、その時代の要請にあったデザインをうまく取り込むことができているからこそ、民族衣装の着用率が高い、と言えるのである。

この点は、民族衣装に限らず、文化遺産の継承を考えていく上で非常に示唆に富む点である。もちろん、こうした状況を観光地化に伴う伝統文化の破壊と見る向きもあるが、私たちは「活きた」文化遺産が時代の要請に適応しつつ多様に進化し、継承されていくプロセスであると考えてみたい。あるいはそうした進化は、生物進化とのアナロジーで語ることができるかもしれない。いずれにしても、民族文化とは観光開発のごときで破壊されてしまうような貧弱な遺伝子ではないと思うのである。こうした視点から捉えると、文化遺産の保存と継承は、全く異なる角度から議論が可能になるのではないだろうか。

3. 変容する文化～何を変化させ、何を遺すのか

世界の先住民族や少数民族の民族衣装の事例を見てみると、生活の西欧化の波に押されて消滅の一途を辿る場合が少なくない。しかし、麗江旧市街地では、興味深いことに地元政府が政策的に開発した新民族衣装が順調に普及したことにより、1980 年代以降、洋服化の波に逆らうことなく、日常における民族衣装の着用率が上昇している。世界遺産登録後の観光地化という状況においても、これまでの伝統的モチーフを生かしたユニフォームを開発することで、民族衣装が新たな展開を遂げつつある。さらに印象的なのは、あらゆるタイプの衣装で着こなしに比較的自由なアレンジが認められる点である。若年層だけでなく、高齢者においても、新民族衣装の前掛けを合わせたりしている姿が普通に見受けられる。

洋服化の波も観光産業の隆盛化も受け入れ、そ

れと調和させる形で新たなタイプの衣装を創出している現状は、文化遺産の継承と新たな文化の創造という面で、非常に示唆に富んでいる。

「古典的型」を民族衣装と呼ぶのではなく、「民族のアイデンティティが込められた衣装」を民族衣装と呼ぶならば、背中の「披星載月」が表すナシ族の民族的アイデンティティは守りながらも、「古典的型」を柔軟に変容させ、新たな生活スタイルや現代文化に融合させ、創出される衣装は、たとえ従来のものと著しく異なる形の衣装であっても、それは「民族衣装」と呼ぶべきであろう。

このことは、文化遺産の保存・継承とはただ単に古いものを凍結保存すれば良いわけではない、ということを示唆している。遺跡であれば話は別であるが、こと衣食住に関する文化は時代に合わせて常に変化を余儀なくされる。そこで何を変化させ、何を遺すかこそが重要な命題となるのである。

4. 文化遺産の創造的継承の意味するところ

ナシ族の民族衣装が洋服化の流れに適応しやすいのは、そもそも上下共に、ブラウス、ベスト、背当て、ズボン、スカート、前掛けと、身に着けるパーツが独立して存在してきた点が大きいことは間違いないだろう。上下ひとつになったワンピース型の衣装とは違い、部分によって別のものに代用できるからである。しかしながらこうした形態的特長があれば民族衣装が洋服化に適応できるかといえばそうとは限らない。全面的に洋服を取り入れるという選択肢もあったはずである。より注目すべきなのは、ナシ族自身が、自らのアイデンティティを再確認し、異文化を受け入れ、伝統文化の取捨選択を自ら行い、変容・発展させていくことのできる民族性を有していたという点であろう。この点は建築や音楽、言語についても同様に認められるナシ族の特性であると考えられる。

そもそも「文化遺産を継承する」とは、どういうことなのだろうか。それは、やがて消えてしまうであろう民族の記憶を、適切な方法を以って保存し、後世へ引き継いでいこうとする強い意志の表れである。つまりは、民族文化が危機的状況にあることを示している。一度失ってしまったものを取り戻すことは、確かに難しい。しかし、意識して保存しなければならないという行為が、実は不自然であるということを自覚する必要があるだろう。文化とは、人々の生活の中で活き、自然に受け継がれていくことが、最も理想的な姿ではないだろうか。凍結保存するばかりが全てではない。今回紹介するナシ族の民族衣装のように、その時代の要請に応じ、その時代の技術で改良を試みていく。興味深いことに、こうした作業を通して、文化にその時代、その時代の新たな記憶の痕跡が重層的に蓄積されていくのである。過去の記憶の土台の上に新時代の記憶を積み重ねていく。この作業こそが文化を未来に向けて「創造的」に継承していくことの意味ではないだろうか。

---

*1 フリーテキスタイルデザイナー

*2 摂南大学大学院国際言語文化研究科修士課程、元雲南省麗江納西族自治県城建局職員。納西族